⑧ 岩手県岩泉町／山口屋 山口守さん

保冷車という新たな武器で地域のニーズに応える

左から佐々木民子さん、山口紳さん、山口守さん。守さんが履いている赤い長靴はがれき撤去の際に支給されたもの

岩手県東部の岩泉町小本（おもと）地区。三陸海岸のこの町で津波の被害を受け、その後、共同仮設店舗で営業を再開した食料品店「山口屋」では現在、軽トラの保冷車を活用して、多くの人々に新鮮な魚を届けようと奮闘している。

日本三大鍾乳洞のひとつ、龍泉洞で知られる岩泉町。その東端、三陸海岸の小本地区が津波で大きな被害を被った。

小本地区で被災した食料品店や衣料店、家電店などの7店舗が現在、三陸鉄道小本駅近くの共同仮設店舗「みらいにむけて商店街」で営業している。その名前は地元の小学生が命名した。一昨年9月にオープンしたこの商店街は、平屋プレハブ2棟からなり、近くには約70世帯200人が入居する仮設住宅「小本団地」がある。

「鮮魚を扱っていますから、軽トラの保冷車を借りることができ、新鮮な魚を多くのお客様に届けられるようになりました」

「このあたりでよく獲れる"スイ（ソイ／メバル）"という魚は、トゲが多くて調理しづらいんだけど、脂の乗った白身が格別のうまさなんだよね。わが家では、シンプルに塩焼きにするのが定番です」（買い物に来ていた男性客）

そう話すのは、仮設住宅で生活しながら、「みらいにむけて商店街」で魚や食料品などを販売する山口屋の山口守さん(43)だ。

山口さんは震災前、海岸近くで鮮魚の加工場を併設したスーパーマーケット山口屋を営んでいた。しかし津波で被災。「みらいにむけて商店街」のオープンとともに念願の営業を再開した。

「町が元気になれば商売も元気になると信じてがんばる」と山口さん

借りた軽トラの保冷車が仕入れに配達に大車輪

営業再開から1年になる昨年9月、山口さんは岩泉商工会から軽トラの保冷車を借り受けた。毎朝の市場での仕入れをはじめ、商品を売りにいくこともあれば、電話やファックスで注文を受けた商品の配達にも使っている。配達で多いのは、店舗を訪れて買い物をしたお客さんから、その商品の配送を頼まれることだそうだ。それは、周囲にまだ商店がない被災した場所の自宅に、いまでも住んでいる人が少なくないからだという。

「保冷車なので、通常の軽トラックと比べれば、市場で仕入れた魚を店に運んでくるときも、配達で魚を届けるときにも、新鮮な状態を保てます。だから安心ですし、お客さんにも喜ばれています」

いまでは商品もそれなりに揃ったが、営業を再開したばかりのころは品数も少なく、かつての得意客が大手スーパーの袋を下げているのを見ては、辛い思いをしたと、山口さんはいう。

「水揚げが増えるとともに、ようやく扱う魚も増えてきました。地元の人は魚が好きですから、とても喜ばれていますよ」

山口屋の店内には小本を鼓舞するメッセージが

新鮮な商品を提供するためにも、山口屋にとって保冷車はかかせない存在だ

山口屋の目玉商品は、安くて新鮮なお刺身や260円のお弁当。家族経営ですべて手作りだからこそ実現できる。「地域の人に喜んでもらいたいという想いで値段はがんばっています。イカ刺しがつながったまま切れてなくて、注意されることもあるんだけど(笑)」

小本地区の海岸部で津波被害を受けた7店舗が入居する共同仮設店舗「みらいに向けて商店街」

〝とにかく自分の商売を続けるしかない〟という決意

3月11日の震災発生直後、店にいた山口さんは、消防団に所属していたため、小本川河口の水門に向かった。津波対策として、地震発生時に消防団が水門を閉めることになっていたからだ。仲間も集まり、停電のさなか自家発電で大小ある水門の大水門を閉めることができた。しかし小水門がしまらない。そこで水門の上の機械室で手動で閉める作業を続ける仲間たち。山口さんは彼らに渡す無線機をとりに、屯所に向かった。するとまもなく水門のほうからゴーという音が聞こえ、波が引き始めた。ただならぬ周囲の状況に危険を感じ、山口さんは安全な場所まで避難した。

「水門にいた仲間の無事を知ったときは、本当に安心しました」

山口さんの家族や従業員もみんな、避難して無事だったが、店舗は流されてきた隣家がぶつかり、半壊してしまった。

翌日からは、消防団として、行方不明者の捜索やがれきの撤去作業に追われる日々。そんななか、ともに作業していた仲間は、日ごとに1人、また1人と勤め先の会社に復帰していった。

「私は自営です。いくら待っても、誰も何もしてくれません」

ここで商売を続けるしかない。そう決意した山口さんは、とにかくできることから始めた。小本駅前でのイベントでは、流されずに店に残っていた缶詰や缶

お客さんの細かなニーズに応える

「店内の棚の数は徐々にそろってきましたが、この手作りの陳列棚に関しては、今後も使い続けていくつもり」と山口さんが話す木製の棚は、大工であるお義父さんが店舗再開時に作ってくれたもの。いまは地域で採れる野菜が並べられている。

ビールを洗って、被災商品として半額で売った。店にあった鉄板でイカを焼いて販売したこともあった。

徹底的に地域にこだわり続けて お客さんの細かな声に耳を傾ける

そして一昨年9月、山口さんはやっと営業再開にこぎ着けた。

「これで1人でも多くのお客さんに新鮮な魚や生活必需品を届けることができると思いました。再開までには、冷蔵庫やショーケースなどの設備や什器を、安価や無償で譲っていただいたり、見ず知らずの人も含めて、本当に多くの人に助けられました。

震災は商売をするためのすべての武器を奪いました。包丁もレジも買い物袋も……。あって当たり前のものが、なにもない。被災したことで、商売にはそれらのものが大切な武器だったのだと気づかされました」

いま、山口さんは保冷車という新たな武器も手に入れた。

「自分は便利屋、御用聞きだと思っています。お客さんの細かな要望に耳を傾けていきたい。また、震災前から変わらずに山口屋で買い物をしてくれるお客さんの気持ちに応えたいですね。

われわれ個人事業者は地域に根づいた商売をしなければ生き残れません。たとえば仮設住宅は台所が狭いので、切り身の魚のほうが喜ばれる傾向にある。そこで切り身の品揃えを充実させる。そんなちょっとしたことがお客さんのためになるのです」

山口さんはいま、大手にはできない細かなニーズに応える店づくりに取り組んでいる。

「そして、やがては新たに自分の店を構えたいですね」

自分に言い聞かせるように、山口さんは語った。

「いつか店を再開するから、それまで待っててね」

来てくれるお客さんにそう声をかけ、自らを奮い立たせた。

鮮魚や野菜、食料品、生活必需品のほか、総菜や弁当なども販売する「山口屋」。とくに地場産の魚や野菜などにこだわって品揃えをしている

山口屋は、被災した7つの地元商店からなる「みらいにむけて商店街」に入居する。近くの仮設住宅からは3分の立地にあるための、買い物だけでなく、話をしにやって来るお客さんも多いという。「人と話をするだけでも元気になりますし、特に用がなくてもフラッと入ってきてほしいですね」